

実例にもとづく大学図書館評価の概念枠組みの精緻化

隋 亥華（慶應義塾大学大学院文学研究科） zuyikk2010@a8.keio.jp

1. 研究の目的

すでに昨年度、大学図書館評価のマクロな概念枠組みを構築した¹⁾。これを受けて、本研究は、図書館評価に関する図書の内容分析によって、先の概念枠組みを精緻化する。更に、北米を中心に実際の大学図書館の内部評価と外部評価の報告書を入手し、その構成要素を概念枠組みにマッピングする。これにより、妥当性と網羅性をもつ概念枠組みへと精緻化させることが本研究の目的である。

2. 図書の内容分析による概念枠組みの妥当性

一般に社会科学における妥当性とは、確実な根拠に基づいたり、論理的に正しい推論であったりすることをいう²⁾。本研究は質的研究であるため、構築された概念枠組みの妥当性は、確実な論拠と論理的な推論によって保証される。図書館評価概念枠組みに妥当性をもたせる為に、まず、内容分析対象となる図書における枠組みの構成要素の定義と要素間の関係を整理する。その上で、本研究では構築された概念枠組みの各要素との関係を十分に考慮し、修正・追加する必要がある要素を明らかにする。

2.1 内容分析対象となる図書の抽出

内容分析対象となる図書を抽出する為に、被引用回数を使用した。本研究では、Google Books と CiNii Books の両データベースを用いて、「library evaluation」「library assessment」「library measurement」を検索語に図書検索した。Google Books による検索結果は 3,107 件で、そのうち、上位の 300 件について、Google Scholar を用いて図書の被引用回数を調査した。一方、CiNii Books による検索結果は 663 件で、そのうち、ノイズを除いて得た 201 件について Google Scholar において被引用回数を調査した。両方の結果を組み合わせ、重複タイトルを除き、出版年が 1990 年以降で、被引用回数 30 回以上の図書計 38 冊を内容分析の対象として抽出した。

2.2 内容分析の手順

図書 38 冊による内容分析の手順として、まず、マクロな概念枠組みの中の核となる図書館評価サイクルを完成させる。次に、評価サイクルの主な構成要素を部分ごとに精緻化していく。

2.2.1 図書館評価サイクルの検討

図書館評価サイクルについては、多くの図書においてより詳細なモデルが検討されている。Peter Hernon と Charles R. McClure(1990)³⁾は、図書館評価が 3つのプロセス(準備、

評価の調査、組織の発展)で構成されると考えた。これは昨年度構築したマクロな概念枠組みにおける PDCA サイクルと一致する。よって、彼らが提唱するモデルにおける図書館員の育成、文献調査、プログラムとサービスの開発を本研究のマクロな図書館評価サイクルに追加した。ほかに、Matthews (2007)⁴⁾が紹介した Balanced Scorecard においては、戦略目標—重要成功要因—評価指標—ターゲットの 4つのステップがある。これは本研究の概念枠組みとも一致している。よって、「Input—Process—Output—Outcome」のプロセスを、評価サイクルの要素間の関連付けを元に、本研究では<基本モデル>と称する。したがって、図書館の評価サイクルは図 1-A のように精緻化できる。次の段階では、サイクルを構成している戦略立案、重要成功要因、評価指標、データの収集・分析方法の 4つに焦点を当て、それらの構成要素を明らかにする。

2.2.2 図書館の戦略立案の検討

2000 年に、Peter Hernon と John R. Whiteman⁵⁾は、計画立案のプロセスを挙げた。これは、ビジョン・ミッション説明、目標の設定、ターゲットの設定、といったプロセスである。(図 1-B を参照)

2.2.3 図書館評価の重要成功要因の検討

「Input—Process—Output—Outcome」の基本モデルに関する議論は従来、それぞれの視点の違いで、提案されたモデルも多少異なっている。例えば、John Carlo Bertot(2004)⁶⁾の「Input—Activity—Outcome」のモデルには、図書館員の業務プロセスが欠けている。Activity よりも、他のプログラムやサービスを含める Output の方が適切だと考える。故に、本研究では、Steve Morgan(1995)⁷⁾の「Input—Process—Output—Outcome」モデルをもとに、さらに利用者への効果としての Outcome と、より広範な社会経済的な影響を含む Impact との 2つに分けて、「Input—Process—Output—Outcome—Impact」を提案する。(図 1-C を参照)

2.2.4 評価領域と指標の検討

Joseph R. Matthews (2004)⁸⁾は、図書館の有効性を中心に、「Input—Process—Output—Outcome」によってそれぞれの評価指標を明らかにした。本研究では、「Input—Process—Output—Outcome—Impact」をもとに評価領域を分けた。そして、先行研究における評価領域間、評価領域と指標間、評価指標間との関連付けを考慮した上で、図 1-D の大学図書館の評価指標群を構成した。

2.2.5 評価データ収集・分析方法の検討

評価データ収集・分析方法に関しては、多くの図書で扱われており、質的法と量的法の2つに大別できる。本研究では、それらの評価データ収集・分析方法を図1-Eにまとめた。中でも、内容分析と概念地図は質的法でもあるし、量的法でもあると言える。そこで、図1-Aから図1-Eを組み合わせたものが、大学図書館評価のより精緻な概念枠組みとなる。

図書の内容分析によって、確かな根拠があり、論理的な相互関係が考慮された概念を、本研究の枠組みにとって不可欠な構成要素として取り入れた。これにより、評価の概念枠組みは、確実な根拠に支えられ、妥当性をもつことになると考えられる。

3. 事例に基づく概念枠組みの網羅性

3.1 網羅性の検証方法

本研究における網羅性とは、図書館評価に関わる概念や用語が洩れなく構成要素として含まれているかの程度を指している。図書館評価の概念枠組みの網羅性を検証する為に、米国の大学図書館をとり上げ、個々の大学図書館、民間の協会組織、国家レベルの組織、国際標準化機構という4階層の評価主体に着目する。そして、それらの図書館評価報告書や研究成果を対象に検証を行う。まず、構築した概念枠組みの構成要素を配したマッピング表を作成した(表1を参照)。次に、各実態評価報告書類や研究成果から洗い出された項目をこの表にマッピングする。

3.2 マッピングする為の評価報告書等の収集

3.2.1 個々の大学図書館の内部評価

2012年のNational Center for Education Statistics (NCES)のカーネギー分類法¹⁰⁾に基づき、博士号と修士号の学位を授与する計20大学の図書館内部評価年次報告書を収集した。

3.2.2 民間の協会組織による図書館評価

(1) Association of Research Libraries (ARL)によって開発された大学図書館評価のゲートウェイであるStatsQUALに含まれるARL Statisticsと、MINES for Libraries, LibQUAL+, ClimateQUAL, DigiQUAL, LibValue等の評価ツールの研究成果を収集した。(2) Association of College & Research Libraries (ACRL)は、図書館価値(Library value)に関する研究を行っており、その報告書を収集した。

3.2.3 国家レベルの組織による図書館評価

2012年に、NCESによって行われた米国大学図書館調査の報告書¹⁰⁾を収集した。

3.2.4 国際標準化機構による図書館評価

マッピング作業を行う上で必要な規格として、図書館評価に関する最新の国際規格であるISO11620(2010)Library performance indicators, ISO2789(2013) International library statistics, ISO16439(2014) Methods

and procedures for assessing the impact of librariesを取り上げた。

3.3 マッピング作業と網羅性の検証

収集された評価報告書と研究成果から図書館評価枠組みに関する項目を抽出し、構築した概念枠組みマップに位置付けた。表1において、本研究が構築した図書館評価概念枠組みは、評価報告書におけるすべての構成要素を網羅しているため、概念枠組みの網羅性を示すことになる。本研究を通じて、図書館評価枠組みをいっそう精緻なものにすることができたと考える。

謝辞

本研究は、2014年度三田図書館・情報学会研究助成を受けて実施しており、御礼を申し上げます。

注・引用文献

- (1) 隋玄華. “図書館のための概念枠組みの開発とその方法”. 2013年度三田図書館・情報学会研究大会発表論文集. 東京, 2013-11, p.1-4.
- (2) Schwandt, T.A. (2007) The sage dictionary of qualitative inquiry. Sage Publications, Inc. (シュウント T.A.) 伊藤 勇等 (訳)(2009). 質的研究用語辞典 北大路書房)
- (3) Herson, Peter; Altman, Ellen. Assessing Service Quality: Satisfying the Expectations of Library Customers. Chicago: American Library Association, 1998. 243p.
- (4) Matthews, Joseph R. The evaluation and measurement of library services. Westport, Conn.: Libraries Unlimited, 2007. 372p.
- (5) Herson, Peter; Whitman, John R. Delivering satisfaction and service quality: A customer-based approach for libraries. Chicago: American Library Association, 2001. 181p.
- (6) Bertot, JC; Davis, DM. Planning and Evaluating Library Networked Services and Resources. Libraries Unlimited, Inc.2004. 374p.
- (7) Morgan, Steve. Performance assessment in academic libraries. London; New York: Mansell, 1995. 211p.
- (8) Matthews, Joseph, R. Measuring for results: the dimensions of public library effectiveness. Westport, Conn.; London: Libraries Unlimited, 2004. 240p.
- (9) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会. 図書館情報学用語辞典. 第4版, 丸善出版. 2013, p. 238
- (10) Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching. “Classification Description”. Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching. (参照 2014-09-28). <http://classifications.carnegiefoundation.org/descriptions/basic.php>
- (10) National Center for Education Statistics. Academic Libraries: 2012 First Look. (参照 2014-09-28). <http://nces.ed.gov/pubsearch/pubsinfo.asp?pubid=2014038>

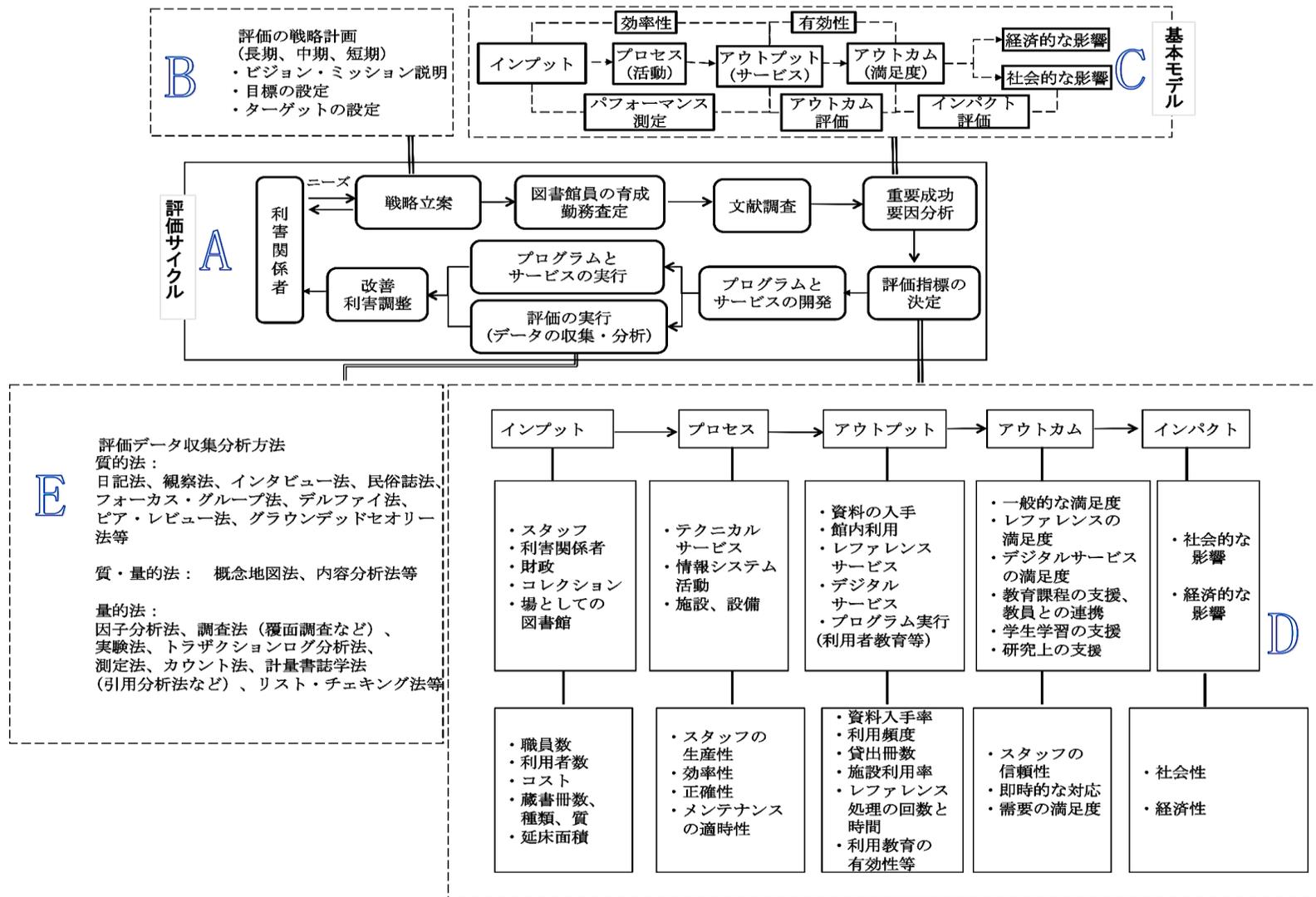


図1 大学図書館評価の概念枠組み

